

# 高等教育におけるグローバル化に向けた

## 現代アートの社会実践

—東京藝術大学とパリ国立高等美術学校との国際共同プロジェクト—

Social Art Practice for Developing Global

Awareness in Higher Education:

International Joint Project between Tokyo University of the

Arts and École Nationale Supérieure des Beaux-Arts

東京藝術大学美術学部長・大学院美術研究科長 **保科 豊巳**

HOSHINA Toyomi

(Dean of Faculty of Fine Arts, Director of Graduate School of Fine Arts,  
Tokyo University of the Arts)

東京藝術大学大学院美術研究科特任准教授 **和田 菜穂子**

WADA Nahoko

(Project Associate Professor of Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts)

**キーワード：現代アートの社会実践、国際共同学位プログラム、海外の大学との交流**

### 1. はじめに

平成27年度より東京藝術大学大学院美術研究科では、世界の芸術系大学の最高峰であるパリ国立高等美術学校（以下、エコール・デ・ボザールと明記する）、ロンドン芸術大学、シカゴ美術館附属美術大学の各大学と連携し、各大学と東京藝術大学のファインアート分野の教員と学生から成る3つのユニットチームによって、各国で行われる国際芸術祭のアートプロジェクトなどを組み込んだ国際共同カリキュラムを実施している。

本取組は、文部科学省「国立大学改革プラン」を踏まえた本学の機能強化・グローバル展開戦略の一環として実施しており、去る2月23日に東京藝術大学において、上記4大学の学長らが集い、国際共同学位プログラム構築等、グローバル人材育成に向けた取組の実施に関する連携協定を締結した。

海外から第一線級の芸術家をユニットとして誘致し、国際共同プロジェクトを実施するとともに、本学からも教員・学生を派遣し、世界一線級の芸術大学間の連携によって実践型アートプロジェクトを展開するものである。これは世界トップレベルの若手芸術家の戦略的育成を目指している。

本レポートでは、今年度初めて試みた東京藝術大学とエコール・デ・ボザールの国際共同プロジェクトの実践と成果について述べることにする。

## 2. 大学間連携の経緯

本学と提携を組んだエコール・デ・ボザールはヨーロッパでも有数の名門美術学校である。その歴史は古く、ルイ14世が17世紀に設立したアカデミー・フランセーズを母体とし、約360年の伝統を有している。絵画、彫刻、建築などの分野で美術史上に名を残した著名な芸術家を数多く輩出しており、エコール・デ・ボザールへの留学を希望する学生の数は多く、昔から広く門戸を開いていた。現在は50以上の大学と協定を結び、より積極的に留学生の交換、受け入れを行っている。

本学とも交換留学レベルでの国際交流はあったが、今年2月に締結された4大学間の連携協定を機に、世界トップレベルの芸術家の育成を目的とし、学位や単位の相互認定を見据えた高等教育の取組に着手することにした<sup>1</sup>。

## 3. 国際共同プロジェクトの目的

本プロジェクトは国境を越え連携し、グローバルな人材育成に取り組むもので、「現代アートの社会実践」(ソーシャル・アート・プラクティス)を掲げている。具体的には両校の教員と学生が日本とフランスを行き来し、双方の大学施設等を利用しながら、リサーチ、フィールドワーク、ワークショップ、レクチャー、展示などを行うもので、最終的に「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015(以下、大地の芸術祭と明記する)」を社会実践の場としている。国際芸術祭への参加を大学間の国際共同カリキュラムとして位置付けて実施するのは、世界的にも他に例を見ない。

本プロジェクトは現代アートを世界の歴史、文化、社会等の文脈から見つめ直しその意義を問うもので、具体的には「私と自然」をテーマに掲げることにした。現代において自然、環境等に対する社会問題はグローバルな問題となっており、日本での未曾有の大惨事となった東日本大震災以降、我々日本人は身近に存在する自然をより敏感に意識せざるをえなくなった。ヨーロッパにおいても、日本での震災被害は他人事ではなく、人災ともいえる原発事故も含め、高い関心事となっている。本プロジェクトでは、何度も繰り返されてきた自然災害の脅威とその歴史、お互いの国における独自の自然観などの見識を深めた上でその差異を認識し、異文化理解を深める、というプロセスを踏み、さらに表現者として自己省察しながら現代における芸術表現の幅を広げていくことを目的とした。

#### 4. プロジェクトのユニット構成要員

本プロジェクトは東京藝術大学とエコール・デ・ボザールでユニットを組み、構成要員は東京藝術大学の教員7名、エコール・デ・ボザールの教員2名、両校のアシスタント3名、両校の学生各10名から成る。本学の教員は美術学部（絵画科、彫刻科、工芸科、先端芸術表現科）と音楽学部（音楽環境創造科）の中から本プロジェクトにふさわしい、現代アートの最前線で活躍中の気鋭の芸術家教員も含め、層の厚い教育体制を組んだ。エコール・デ・ボザールの教員2名はフランス国内外で幅広く活躍する芸術家と芸術批評家である。両名とも日本と親交が深く、東日本大震災以降も被災地でドキュメンタリーフィルムを撮影するなど、現代日本が抱える問題を直視している。フランスは元来、多民族国家、多文化共生国であることから、参加学生は自ずと多様な国籍（フランス、中国、イスラエル、シリア等）を持つ者で構成された。

東京藝術大学では4月を準備期間とし、大学院美術研究科の学生（修士課程および博士課程の学生）に広く働きかけ、本プロジェクト演習の受講生の募集を開始した。志願者に対し書類審査を行い、個人面談では英語力を測るためネイティブ教員による質疑応答を行い、最終的に10名に絞り込んだ。国際社会に関心のある意欲的な学生が選抜され、結果として油画、彫刻、先端芸術表現、工芸、建築といった多様なバックグラウンドを持つ学生が参加することとなった。

#### 5. 国際共同プロジェクトの具体的な取組み (1) 大学での共同授業

新学期開始以後、東京藝術大学ではプロジェクトテーマ「私と自然」に関するリサーチを開始した。同時に国際コミュニケーション力を高めるため、ネイティブ教員による講義も開設した。5月はプレセッションとしてエコール・デ・ボザールの教員2名を招聘し、共同授業、特別講義、ワークショップ等を行った。フィールドワークとして本プロジェクトの最終成果を発表する、新潟県十日町市まつだいエリアへ赴き、大地の芸術祭に参加するための現地視察を行った。



東京藝術大学での共同授業

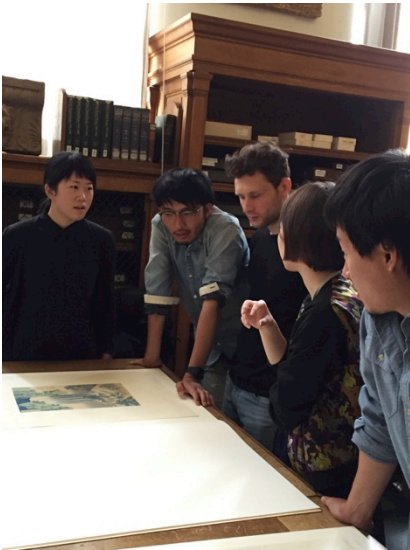


東京藝術大学での五感を感じるワークショップ

その後6月に第1セッションとして2週間、本学の教員と学生が渡仏し、エコール・デ・ボザールにて共同授業、ワークショップ等を行った。本学の学生は各自英語にてプレゼンテーションを行い、

事前にはリサーチした自然災害（地震、津波、噴火等）の歴史、破壊と再生を繰り返してきた日本の文化、日本における国際芸術祭の位置づけ、現代アートと地域社会との連携、越後妻有という特異な地域性（豪雪地域、限界集落）等について、フランス人学生に向けて発表した。

パリでの共同授業は双方の学生が出会う初めての場であった。多様なワークショップがおこなわれたが、最終的に日仏の学生がペアを組み、「仮面（マスク）」の課題に取り組んだ。これは心理学者カール・グスタフ・ユングのペルソナの概念を元に、自己の外的側面を覆う装置を制作する課題である。成果物はボザール内のギャラリーにて展示された。



ボザールでの共同授業



ボザールでの仮面（マスク）の展示

## 6. 国際共同プロジェクトの具体的な取組み (2) 現代アートの社会実践

第2セッションは6月末から8月中旬までの7週間で、ボザールの学生と教員が来日し、現代アートの社会実践に取り組んだ。前半の4週間は東京藝術大学の上野校地と取手校地にて、共同授業、ワークショップ等を行った。さらに本プロジェクトを深く掘り下げるため、東北学を提唱した民俗学者とあいちトリエンナーレで芸術監督を務めた批評家を外部講師として招聘し、特別講演会を2回開催した。

後半3週間は社会実践の場となる新潟県十日町市まつだいえリアにて滞在制作を行い、大地の芸術祭に参加した。その集大成が去る8月6日におこなれたパフォーマンス・イベント「私と自然 11の夢」である。輝く星空の下、ぶなが池植物公園に設けられた屋外ステージは、一夜限りの夢のショーが繰り広げられる幻想的な舞台となった。定員をはるかに超える約150名の観客が集まり、日仏でペアを組んだ学生10組は、舞台の上でパフォーマンスを披露した。衣装、音楽<sup>2</sup>、振付はすべて彼ら自身が創作したものである。自然と一体化した会場で繰り広げられたパフォーマンスは、独創的な世界観に導いたとして、越後妻有トリエンナーレ公式ホームページで高く評価された<sup>3</sup>。

なお、パフォーマンスには芸術祭プログラムの林間学校に参加したこども約30名と香港の中高校生20名も出演し、こどもたちの歌と香港の学生たちの竹の演奏は、パフォーマンス・イベントの最後を締めくくった<sup>4</sup>。

パフォーマンスの成果は現代美術としての舞台装置や衣装制作、身体表現等である。その成果は大地の芸術祭の会場のひとつである奴奈川キャンパスにてドキュメント展示として公開した。



パフォーマンスの様子



こどもたちによる歌の披露（写真撮影：中村脩）



香港の学生による竹の演奏（写真撮影：中村脩）



大地の芸術祭 奴奈川キャンパスでの展示 (1)



大地の芸術祭 奴奈川キャンパスでの展示 (2)

## 7. プロジェクトの成果と課題

大地の芸術祭は2000年からスタートした現代アートの祭典で、世界有数のトップアーティストが出演しており、現代アートによる地域おこしの成功事例として世界中から注目を集めている。東京藝術大学とエコール・デ・ボザールの学生にとって、大地の芸術祭への参加は、今年4月より取り組んできた「現代アートの社会実践」を遂行するにふさわしい格好の場となった。現場での困難と苦戦しつつも、世界のトップアーティストが集う大地の芸術祭で彼らと肩を並べ、次世代を担うこどもたちや地域の人たちと連携し、本プロジェクトを完遂させたことは、アーティストとしての自覚と責任を持つことに繋がったであろう。さらにプロジェクト全体を通じ、両国間の異文化を享受する柔軟な思考力を身につけ、社会に対し常に問題意識を持ち、その解決に向け現代アートの持つ意義を考える素晴らしい契機になったと確信している。

本プロジェクトは「大地の芸術祭でのパフォーマンス」という具体的な到達点を設け、それに向かってユニット全体が取り組んでいくシステム構築とそのプロセスが課題となった。パフォーマンスの基本構成は日仏ペアの学生10組によるもので、ペアは意図的に（半ば強制的に）「共に行動せざるをえない」という状況に置かれた。ペア同士のコミュニケーションは、共に過ごす時間が多くなればなるほど深まっていったのは言うまでもない。本取組はペアでの協働作業や全体での集団行動によって異文化理解に繋がった「実践型教育モデル」といってよいだろう。

越後妻有での3週間の集団生活は、お互いの距離を縮める絶好の機会となった。学生間では自ずとリーダー的存在となる者や、サポート側にまわる者など、集団での役割分担がなされていたようだ。文化的背景や生活基盤の異なる環境で育ってきた彼らは寝食を共に過ごしなが、異文化理解、異文化適応力を身につけていった。共に過ごした時間と空間は「経験を共有すること」に繋がり、相互の距離感を縮めていった。しかし人と人との関係性は国籍如何に問わず、時には反発や衝突も起こりうる。それは教員間でも然りである。だが、結果的には切磋琢磨し刺激しあい、お互いを高め合う「同志」のような存在となった。それは到達地に向かっていくベクトルが同じ方向を向いていたためであろう。

物理的なもの、精神的なものを含め、「共有すること」が本プロジェクトで重要な鍵となった。

この経験は「集団」と「個」というものを見据えるきっかけにもなり、ひいては「自分は一体何者なのか」という人間の根源的な問いに繋がった。つまり「自己アイデンティティ」に対する模索である。アメリカの心理学者のエリック・ホーンブルガー・エリクソンによると、「自己アイデンティティ」は大きく2つに区分される。ひとつは「社会的アイデンティティ」で、国家・民族・言語・帰属集団・職業・地位・家族・役割などの社会的な属性・関係によって自己を認識するものである。もうひとつは「実存的アイデンティティ」で、唯一無二の存在であるという実存性によって自己を認識するものである。本プロジェクトはまさに両アイデンティティの確立に繋がる教育プログラムとなった。「日本人である自分」を深く省察することは、国際教養人として成長するために欠かせない通過儀礼のようなものである。さらに本プロジェクトでは「アーティストである自分」とも対峙しなければならない。従来アーティストは「個」で勝負する孤独な一面を抱えている。とはいえ「現代アートの社会実践」を掲げた本プロジェクトに参加する以上、他者との関わりや社会に対する客観性、批評的眼識等が不可欠となる。他者とのコミュニケーションから逃れられない。しかし芸術分野におけるコミュニケーションに関しては、言語能力だけでは済ますことのできない側面がある。学生たちはそれらを実体験しながら、「他者」と「自己」との内面の葛藤に打ち勝ち、「自分が何者なのか」を認識し、最終的に自己同一性（アイデンティティ）を導き出すに至ったのではないだろうか。



ペアによるパフォーマンスの様子(1)



ペアによるパフォーマンスの様子(2)

## 8. 今後の展望

国際共同プロジェクトの実施と連動して、平成28年度に東京藝術大学では新たな大学院組織「グローバルアートプラクティス専攻」を設置予定である。同専攻のカリキュラムでは4大学(東京藝術大学、エコール・デ・ボザール、ロンドン芸術大学、シカゴ美術館附属美術大学)を軸とした世界の芸術大学と連携し、国際共同プロジェクトを共通プログラムとして位置付け、グローバル人材育成を推進していく予定である。将来的にはカリキュラム全体を共同化させて、4大学間において「国際共同学位プ

ログラム（ジョイント・ディグリー）」として発展させる構想である。

我が国では2020年開催の東京オリンピックに向けて、文化プログラムが推進されており、その一環として上野における「文化の杜新構想」や「国際文化芸術の祭典」の構想が立ち上がっている。芸術分野の教育の成果ははっきりと作品として現実化できるものであり、上記のような現実社会の実践の場でその意義が問われる事が期待される。学生が今後海外や日本各地で実施されている社会芸術実践の現場で経験することは、次世代を担う若手芸術家の育成はもとより国の文化芸術振興の拡大に繋がるものとして、次の展開が期待されている。

東京藝術大学の本取組は世界の現実社会を直視し、その諸問題を芸術を介して取り上げ、真のグローバル化を目指した実践的なものであり、芸術分野における革新的な高等教育の人材育成モデルのひとつに資するであろう。グローバル人材育成に関わるこの新しい取組は芸術文化の交流のみならず、人と人との関係性から国境を越えた芸術の本質的な役割と新しい価値を生み出す可能性を秘めている。

<sup>1</sup> 日仏間では昨年2014年5月に国家レベルで締結された、日仏両首脳による日仏間の高等教育に関する学位・単位の相互認定協定がある。本学では芸術分野におけるグローバル化を見据え、4大学共同での「共同学位認定（ジョイント・ディグリー）」に向けた動きを取り入れている。

<sup>2</sup> 音楽に関しては東京藝術大学音楽学部の学生と協働し、事前に自然界から取材した音をアレンジし、3～5分の曲を制作した。

<sup>3</sup> 越後妻有トリエンナーレ公式サイト

[http://www.echigo-tsumari.jp/news/2015/08/news\\_201500807\\_04](http://www.echigo-tsumari.jp/news/2015/08/news_201500807_04)

<sup>4</sup> 「越後妻有の林間学校」は、毎年東北エリアおよび全国から親子を集め、2泊3日で自然を楽しむ多様なプログラムやワークショップを設けている。今年は東京藝術大学とエコール・デ・ボザールの共同プロジェクト「私と自然」と連携し、親子約40名と「動物のマスクづくりのワークショップ」と「歌のワークショップ」を行った。さらに今年は農業体験のために来日した香港の中高校生20名も加わり、彼らに対しては「竹の楽器づくりのワークショップ」と「竹の演奏のワークショップ」を行った。

\* 掲載写真で撮影者名のないものは、すべて©東京藝術大学×パリ国立美術高等学校グローバルアート共同カリキュラム2015